
チョコとゲームとバカップル

聖闘士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコとゲームとバカップル

【Nコード】

N8536J

【作者名】

聖闘士

【あらすじ】

日本人の正しいバレンタインの過ごし方（？）

*この小説は『梨とコタツとバカップル』の続編となっていますが、前作を読んでいなくとも楽しめる内容となっています。

ここはとあるアパートの一室のドアの前。一人の男が、ドアを開けるために鍵を差し込んだ。

「——ただいま」

男が返事を全く期待しないで言った言葉に

「おつかえり〜、待ちくたびれちゃったわよっ！」

女性の声で返事が返ってきた。

男が慌ててリビングへと目をやると、そこには男の彼女がコタツでくつろいでいるという気の抜ける光景が広がっていた。女の両手両足ともコタツの中に入っており、まさしく『ぬくぬく』という擬音がピッタリの状況である。

「つつつ！どうしてお前がうちに居るっ？」

「あら・・・もしかして、今日が何の日だか覚えてないの？」

「・・・そうか、今日はバレンタインか」

「そうよっ」せっかくあたしがチョコを作ってきたんだから、もつと嬉しそうな顔をしなさいっ！」

「・・・あれを見た後で、か？」

男が指差した先では——女がチョコレートを作るために使用したのである——キッチンが凄惨な事になっていた。当然、このキッチンの掃除が誰の役割なのかは、長い付き合いなので男にはもう分かっている。

「掃除くらい良いじゃない。なんてったって、あたしの手作りチョコレートなのよっ」感動のあまり涙を流して感謝するのが筋つてものだわっ！——！」

「するかっ、そんなことっ！」

「ん~~~~それじゃあ、感謝の踊りを踊ってくれるだけでいいわ」

「お前は・・・そんなに追い出されたいのかっ！」

「こんな寒い中、あたしに外で一晩過ごさせて言うのっ？ご近所のみなさん、ここに人でなしが居ますよ~~~~」

「ええいつ、いちいち大げさなりアクションをとるんじゃないっ！」

——いつも通りのケンカなのかじゃあいなのか分からない言い合いはしばらく続いた。

「ハア・・・それで、肝心のチョコレートはどこにあるんだ?」

男のその言葉を聞いた瞬間、女の顔がいたずらっぽいものへと変わった。

「ふっふっふ・・・あたしの手作りチョコレートが食べたかったら、ゲームをクリアすることね!!!」

「ゲーム?」

「そう、ゲーム。」

——ルールは簡単よ。あたしがこの家の中に隠したチョコレートを、あなたが見つけられればいいだけ」

「ルールはそれだけか?」

「ええ、それだけよ。も・ち・ろ・ん、あたしへの愛の力で一発で見つけてくれるわよね?」

「・・・フン、お前の考えそんな隠し場所くらいすぐに思いつく。お望み通り、一発で見つけてやるさ」

男はそう言つと、チョコレートの隠し場所について考え始めた。

『——やはり一番可能性が高いのは、アイツ自身がまだ持っているパターンだが・・・アイツの居る部屋はストーブがガンガンに焚かれているし、ホットカーペットもつけてある。おまけにコタツ。チョコレートを隠すにしては、溶ける危険性が高すぎる

——その点を見ると、冷蔵庫の中が有力に思えてくるが・・・
あまりに単純過ぎて逆に怪しい

——俺の寝室・・・いや、アイツは案外そういったプライベートな空間には立ち入らないから、俺の許可なしで入ることは考えづらい

——風呂場・・・いや、このアパートの風呂場はトイレと一体になっているから、衛生的に考えて、その線は薄い

——意外と、キッチンという線も有力だな・・・木を隠すには森の中と言うし、あれだけ散らかっていれば探されないと踏んだのかも知れん。だが、ここは・・・」

そうして、決意を固めた男が向かった先は

——先ほど入ってきた玄関であつた。

玄関にたどり着いた男は、郵便受けの中を覗き込んだ。そしてその中にあるものを確認すると、不敵な笑みを浮かべながら女の方へ向き直った。女がつまらなそうな表情をしているのを見て取ると、男は勝ち誇った様子で説明を始めた。

「お前にしては、なかなかよく考えたと褒めてやろう。俺が玄関を開けた瞬間に声をかけてきたのも、俺の注意を郵便受けからそらすための精一杯の小細工だったのだろうが——俺の目は誤魔化せな

い」

そう言うと男は、おもむろに郵便受けの中に手を入れ、すぐにその手を引き抜いた。そしてその手には、包装紙で乱暴に包まれた薄い箱が握られていた。

男は仏頂面をしている女の顔を勝ち誇った様子で眺めながら、包装紙を丁寧にはがし、中に入っていた箱の中身を確認してみると、そこには――

『ハズレ』

と、大きく書かれた紙が入っていた。

それを見た男が口を開けたまま動けずにいると、今まで仏頂面をしていた女の方が、

「――ぷっ、あははははははっっっ」

なぐにが『俺の目は誤魔化せない』よっ！完璧に外してるじゃなぐいっ！――！」

と、コタツに入っただまま大声をあげて笑いだした。

「……馬鹿な……こんなはずは……」

「ふっふっん」慈悲深いあたしは、もう一度だけチャンスをあげるわよっ！今度こそ見つけてみなさいっ」

「ぐっ、偉そうに・・・大体お前はいつも——」

そこまで言った男は何かに気づいたように女の方を注意深く見ると、そのまま何かを考えだした。そしてしばらくの間そこを動かかなかったが、やがて何かに納得したのか、女がコタツで待つリビングへと歩き出した。

男は女の座る横まで来ると、ゆっくりと話した。

「・・・俺は勘違いをしていた。『チョコレート』と聞いて、反射的に板チョコのような固形のチョコレートを連想してしまっていた

——」

そう言っ、いまだにコタツに入ったままの女の右手の方にある布団をまくりあげた。そこには——

新品のマグカップの中で湯気をたてる、甘い匂いのする茶色の液体——
いわゆる『ホットチョコ』と呼ばれるもの——が隠されていた。

マグカップにはきちんとラップがかけられており、埃などが入らないようになっている。

「当たたり」でも、良く分かったわね？あたしは次にキッチンの方を探すかと思ってたわ」

「確かにそのつもりだったさ。だが、お前の様子を見て俺の最初の考えが正しいことを悟ったんだ。」

—— お前が俺を笑い者にするときは、もっとコタツを揺らすぐらい大笑いをしているはずだからな。

大方、ホットチョコがこぼれないように気を使っていたんだろう？」

「失敗したわね・・・でも、一発で当ててくれなかったってことは、あたしに対する愛が足りないってことかしら？」

「・・・俺がホットチョコを考えに入れていなかったのには、深い理由があつてだな」

「あら、負け犬の遠吠え？」

「——断じて違うっ！お前、俺が猫舌だということを忘れているだろうっ！——！」

その言葉を聞いた女はにつこりとした笑顔を浮かべると

「あゝら、それについてはちゃんと計算に入れてあるわよ」

と言って、どこからかスプーン——これも新品である——を取り出した。そしてそれを使ってマグカップからホットチョコを一杯すくい出すと、それを自分の口の前までもっていき「ふっふっ」と

息を吹きかけて冷まし始めた。

女は十分に冷めたと判断したホットチョコを

「はい、あ〜ん」

と言って、男の前へと差し出した。

——男は恥ずかしさのあまり反射的に拒絶しそうになったが、自分が敗者であることを思い出すと素直に口を開き、ホットチョコをじっくり味わって食べ終えた。

「味の方はどうかしら？」

「・・・美味しい・・・」

「さすがはあたしの手作りねっ ♪」

「・・・今回もそういうことにしておいてやる」

「まったく、素直じゃないんだから」

あ、当然ホワイトデーは三倍返しねっ ♪それとプレゼントの仕方もあるが、あたしがやったみたいに「工夫ひとくふうしなくちゃダメよ？」

「・・・善処しよう」

「よろしいっ ♪」

——本日はバレンタイン、恋人たちが甘い思い出に浸る一日である

（後書き）

よろしければ前作『梨とコタツとバカッブル』の方もお読み下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8536j/>

チョコとゲームとバカップル

2010年10月9日00時03分発行